



## 自分に素直に生きる

すえおか とおる  
末岡 徹

株式会社 地圏環境テクノロジー 顧問・技師長

1948 年生まれ。京都大学工学部土木工学科卒業。1973 年大成建設(株)入社。主に技術研究所にて地盤工学分野の研究開発とエンジニアリング業務に従事、その後技術企画部門および土木技術研究所長、副技術センター長などを歴任し、2015 年退職。公益社団法人地盤工学会会長、日本品質管理学会副会長等も務め、学会活動にも幅広く参加。現在に至る。

インタビュー日: 2017 年 2 月 7 日

聞き手: 山崎廉予, 玄間千映子, 加藤隆

### 海外で建設の全てを学んだ

#### 建設会社時代の思い出は？

1973 年、大成建設株式会社に入社し、最初は技術研究所土質研究室に配属され、軟弱地盤、掘削斜面安定などの地盤工学分野の研究とエンジニアリング業務に従事しました。じっとしているのは健康に良くないと思うたちで、現場で働くことをずっと志望していました。入社 5 年目、「ようやく現場に行ける！」と思ったら、アフリカだったので、さすがに驚きました。アフリカでは、ナイジェリア・カドナ製油所作業所で、全ての土木・建築事業の試験研究所の責任者として、ナイジェリア人技術者らを指揮していました。コンクリート・アスファルト・骨材・ヒューム管などを、すべてゼロから作製し、それらの品質管理や地盤調査・土質試験及び、多くの分野のクレームを担当しました。土質試験方法の概要

の英訳や、50 種類くらいの英語の試験シートの作成もしました。建設の原点から体験でき、誰よりも幸せだと思えた経験でした。

海外で、現地の人を統括して仕事をするのは大変だと一般的に言われていますが、私は、“人間みんな一緒”という思想だったので、大変さは感じませんでした。ナイジェリア人は、家族でなくても同じ出身地の仲間のことをブラザーと呼んで、助け合って生きており、昔の日本と重なる部分があるな、と思ってみていました。当時は月 2 日程度の休みしかなく、今思えば「過酷だった」といえますが、精神的にはとても楽しく、自由に仕事をしていたと思います。

学生時代も、理由をつけては海外旅行をしていました。発展途上国がどういう状況なのか、どんな自然があるのか、その国の人がどういう風に生きているのか知れたからです。当時から、自分の

好奇心に非常に素直に、自由に生きているのだと思います。

#### 人との繋がりが仕事に繋がる

#### 現在の仕事を選択されたきっかけは？

部下の勧めです。東京大学発ベンチャーで、地圏の水循環解析に関する地盤工学的助言や教育研修事業、経営アドバイスの仕事に従事しています。大手の企業に行っていたら、今のように自由に仕事ができなかったと思うので、紹介してくれた部下は、私のことをよく理解してくれていたのだと思います。信頼できる部下を持つことは、とてもよいことだと思いました。委員会活動も、専門を限らず、幅広く行っていますが、人との繋がりがきっかけで始めたものが多いです。いろいろな人の違う考え方を知るのが面白く、人と話すことが好きなので、知り合いが多いのだと思います。

また、仕事内容に興味がある会

#### 委員会からのメッセージ

末岡 徹さんは、ゼネコンでの国内、海外の豊富な現場経験等を活かして特に地盤工学分野の研究・開発分野で活躍され、公益社団法人 地盤工学会の会長も歴任されました。現在も大学発ベンチャー企業で活躍されています。定年退職後もなお、幅広い活躍をされている姿を紹介したく、インタビューをお願いしました。

社だったことも選んだ理由の一つです。地圏の中で、土・地盤を陽と考えれば、水・地下水は陰の存在ですが、実は、出水事故や地盤災害、環境を含め水・地下水は地盤工学で最も本質的な役割を果たしていることを実感していました。これまでの「土」に加えて、今は「水」を扱っており、将来は「緑」も体験したいと考えています。

### 今後はなにをやりたいですか？

今後、定年が伸びるといわれていますので、70歳までフルタイムで働き、75歳くらいまでは週2、3日で働きたいと思っています。健康に留意しながら、趣味である、歴史と文明の散歩を、読書、旅行、自転車巡りなどで満喫したいと考えています。

また、自分の考え、体験をできるだけ電子化して残すことを心掛けています。機会があれば、それらの資料を使い、地盤工学会・土木工学会の活動やプロジェクトの紹介・体験・失敗などを、若い人たちと話すことに務めています。

## “遊び”も時には必要

### 仕事を継続してやる秘訣は？

のんびりと、余裕をもってやった方がよいのではないのでしょうか。なんでもできる時代なのに、周りのことを考えすぎて息苦しいのではないかと懸念しています。職人ではないですが、コツコツやるのが日本人だと思います。現代は、インターネットですぐに連絡を取れたり、情報が多く、いやでも何かをしなくてはいけないと思わせたりという時代で大変だと思います。海外旅行をする、ふらっと自転車で出かけ

るなど、気分転換をしながらできるだけ自由に仕事をする事で良いこともあるのではないのでしょうか。

## 体験が自信に繋がる

### 土木技術者が大切にすべきことは？

社会が高密度になっている現代は、多くの職種が事務職のようになっており、現場へ行く機会がとてま少なくなっています。私は、体験が重要であると思っています。体験したことなら、自信をもって他人に語れます。体験がないと、自信をもって最終的な判断ができないのではないのでしょうか。計算だけではわからない部分が何ランクもあると思います。現在の会社は、地圏の水循環に関わる会社ですが、地下水について知らない新入社員もいるので、例えば簡易陶管水道での給水が日本初という、水道の歴史が深い神奈川県の秦野<sup>はだの</sup>を訪問し、井戸や水の流れを見てもらい、土を実際に指で触って、その物性を感じてもらうなど、体験の機会を作るようにしています。

また、建物や構造物は、全部繋がっているという認識を持ってもらいたいと思っています。俯瞰的に、かつ細部を見ることが重要です。傍から見ればたいしたことない破損も、大切などころにも繋がっているという目で見れば、判断の仕方が変わると思います。

## もっと仕事に自信を持って

### 次世代のシビルエンジニアへ一言

弘法大師も含め、歴史上の重要人物は土木技術者が多いです。土木技術者は、土木という現代文明を支えているインフラストラクチャーにかかわる重要な仕事に従

事しており、社会、地域、人々の生活になくはなりません。世の中で役に立っているという責任・自負・自信をもってやってほしいと思います。直接脚光は浴びないけど、「現代文明を支えているのは、あなたたちだよ！」と伝えたいです。

また、自由な強い意志をもって、仕事をしていってほしいと思います。日本社会は成熟社会になっており、多様で自由な生き方ができる時代になっていると思います。このまま働き続けるべきか、起業などで進路変更すべきかなど悩むことがあるかと思いますが、家族や経済面についてよく分析したうえで、やると決めたらやった方が良いでしょう。現在の仕事の延長線、経験を生かした地域貢献やシニア起業、趣味を生かした生活、どれも有意義で楽しいと思います。いずれにせよ、これまでの自然、社会に関する幅広いご経験とご理解は、大変貴重で非常に役に立つと思います。

(文責:山崎廉予)

### インタビューを終えて(聞き手から)

「少年のような目」という表現があります。素直で伸びやかな好奇心、自分に限界を設定しない生き方をいうと思うのですが、失礼ながら対談の最中、そんな景色が言葉の端々に溢れていてとても興味深い時間を戴きました。

ものごとを考えるという活動は、事象とその背景を一塊りにしてこそ可能な活動です。ところが情報のデジタル化は、それらの断絶を加速していきます。その現象に心すべきと云うメッセージは、現役世代のみならず、これからの土木技術者にとっても有益だと感じました。